

動労水戸

国鉄水戸動力車労働組合

茨城県水戸市三の丸三・一・三

発行責任者 石井真一 編集者 西納岳史

電話 029-227-6020

FAX 029-227-6291

Email doro_mito@yahoo.co.jp

6月7日 本社団交争 6月8日 裁判闘争 報告号



裁判後の総括集会

6月8日(金)、動労水戸損害賠償請求裁判が水戸地裁で開かれた。動労水戸は当該組合員と三役がストに入り、傍聴に駆けつけた多くの組合員と家族とともに裁判闘争を闘った。今回のおもな争点は二つ。

①会社は、運転士であったなら得られる夜勤手当と超勤手当を支払え。水戸支社内の夜勤手当と超勤手当の平均値を明らかにせよという争い。

②動労水戸組合員が昇進試験を受けても不合格である問題について、合否基準を明確にすることを会社に求める争い。

①に対しては会社側は「検修職としての実績に基づいて払っているから問題ない。平均値も出す必要が無い」と回答。最高裁判決にさえも従わないということだ。まさにこれが違法企業JRの真の姿だ！絶対に認められない！

②に対しては会社側は、昇進試験の合否判定について、「作文」と「勤務成績」が基準で、勤務成績の評価が5段階評価の「2」以下なら不合格と言いつつ、作文と勤務成績3以上の者から、「一般常識」と「業務知識」の成績を見て決めるというのだ。これでは作文の採点も勤務成績も会社の思い通りではないか。組合側の求めに対し、会社は「勤務成績」と「作文」についての評価基準を明らかにできないというのだ。

その根本にあるのは、会社に従順な労働者をつくるための組合差別に違いない。2005年に国労が昇進問題で会社と和解してから、格段に合格率がアップしていることからそれは明らかだ。今年4月1日から導入された「新賃金制度」は従来の賃金制度のこの不透明な「勤務成績」をよりいっそう重視している。動労水戸の裁判は、この「新賃金制度」による職場支配を打ち破る闘いでもある。組合員が不屈に団結して闘いぬいてきたからこそ、今回の裁判で会社側は「上層部の判断がないと答えられない」と言わざるをえないところまで追いつめられている。

次回の裁判は8月24日(金)。総結集しよう！

外注化は偽装請負だ！
即時撤回あるのみだ！
6月7日(木)、JR本社と動労総連合との間で団体交渉が行われた。会社は3年前の外注化計画をそのまま強行しようとしてきているが、組合側は3・11の大震災や原発事故で情勢が一変したことを踏まえ、「再提案するの筋だ」と会社に厳しく迫った。

労働省告示第37号では、「自ら行う企画又は自己の有する専門的な技術若しくは経験に基づいて、業務を処理すること」としているが、会社は、各社とも現状で検修・構内業務を請け負うことができないことを認めた上で、JR本社からの労働者の出向によって「10月1日からできるようなっている」と回答。クレーンやジャッキなど業務に必要な大型機械をどう準備するかについても、「これまでJR本体で使っていたものを無償で外注会社に貸し与える」と言う。全てが違法行為のオンパレードなのだ。しかも、水戸支社も千葉支

社も今後5年間はエルダー社員はほとんど出ない。そもそもいま外注化を強行する理由は全く存在しないのだ。そうまでしてJR本体でできる業務をわざわざ外注化し、労働者を大量出向させなければならぬのか？労働者の賃金と労働環境を外注会社の条件に変えて低くし、青年を非正規職に叩き込み、グリーンスタッフの時のようにこき使い切り捨てていくためではないか！

自分の事しか考えない労働組合幹部許すな！
会社側は各組合に対して連続して団交を設定し、「6月中に本社交渉を終えて早急に支社交渉に入る」と明言している。9月末までのわずか4か月半の間に、列車輸送の根幹を担う業務を外注会社に移し、膨大な労働者を強制出向させるつもりだ。「やれるわけがない」というのが現場の実感だが、会社はどんなにめちやくちやなことでも強行してくる。職場が破壊され、鉄道の安全が崩壊するのは誰が見ても明らかだ。しかし、これを手助けしているのが東労組と国労の幹部だ。

東労組は自ら外注化10月1日実施を会社から引き出し、「組合案実現を目指す」と言ってこまごまとした「組合案」と引き換えに、「国鉄改革に尽力した先輩たちのために新しい就職先を確保する」と言っている。青年労働者とベテラン労働者を分断するな！労働組合はすべての労働者のため、とりわけ未来をになう青年のために存在するのだ！
国労東日本本部は「委託業務は車両検修業務に限定すること。年間労働時間・休日数をJR本体と同様にすること」を要求したが、会社との合意に至らないまま、6月5日に本社・本部間の交渉を終了した。国労本部は、外注化を認めるだけでなく、事細かな「改善要求」でごまかしながら結局は会社の全面外注化をサポートしている。

原発と同じように、人間として絶対に許せないものを「やむをえない」「必要だ」と言って労働者に強制してきた古い労働組合幹部と決別し、自分たち自身の労働組合をつくる時が来ている！ともに闘おう！

【お知らせ】
今号より本紙編集者は動労水戸平支部書記の西納が担当いたします。